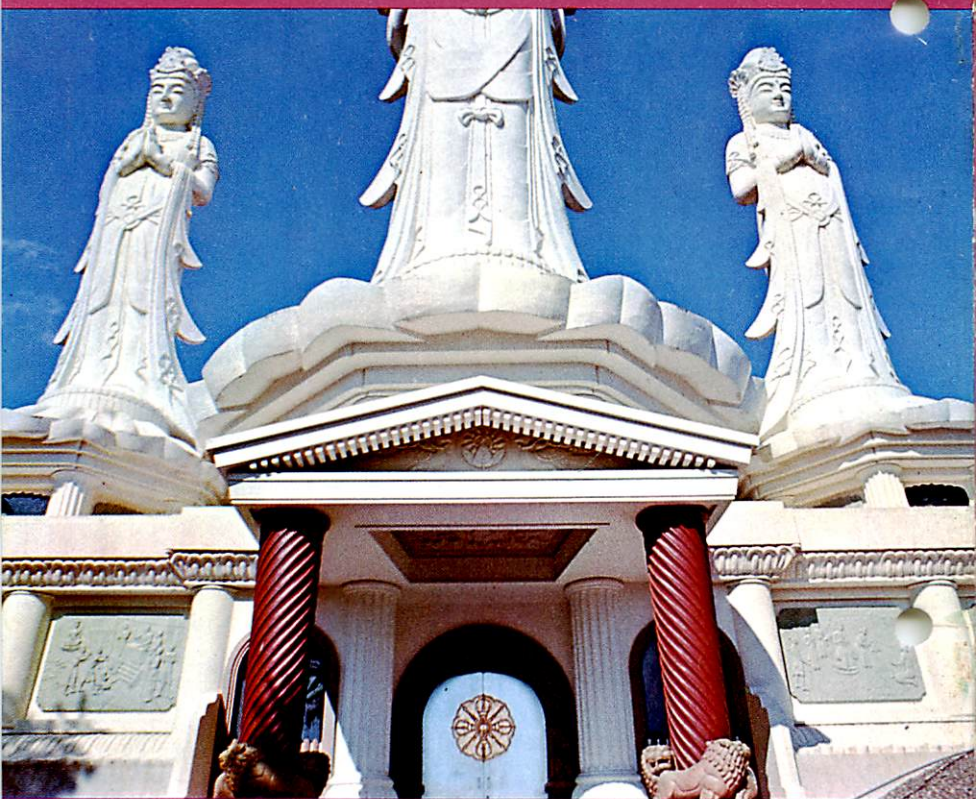


GR
白雲神

とりね



24

昭和47年10月1日

宗教法人

鳥居観音

表紙の説明

- 表紙の写真は、救世大観音の堂宇玄関です。
- その屋根は、ステンドグラスが、下から見えるようにするため、ギリシャ式にしています。
- 正面の、赤色のねじり柱は、クレタ島のクノックス宮殿の、逆柱を模したもので、その根元には、阿吽の六頭の獅子が、柱をとりまいて、警護しています。
- 玄関入口の、ムーンストーンは、御影一枚石に、唐草模様を薄ぼりにしたもので、2.5米あります。これは、セイロン島の寺院によく見かけられます。
- 入口アーチの、双龍、天上の天女、花草は、中近東附近の、図案をとり入れたものです。
この入口には、観音のお脇立の梵天、帝釈天の、レリーフが安置してあります。
- 又入口大扉は、ステンレス製で、外面には三鈷杵さんこしよを十字にくんだ、羯磨金剛かつまこんごうをあしらった、金箔押えの中心飾が輝いています。
- 玄関両脇に安置してある仁王尊は、徳川時代の作です。
- 又その正面にある香爐は、最新型であります。
- 水屋の赤石は、10トンもある見事なものです。

とりゐ 10月1日発行 24号

目次

表紙	救世大観音の玄関	
表紙裏	救世大観音の玄関の説明	
御法話	瓏仙いかだ集より	(其の七)
評論家藤原弘達先生と鳥居観音開祖平沼桐江先生の対談		(5)
西遊記	(其の十九)	岡部千三
田舎医者	(其の四)	見川鯛山
壱万體観音奉安者御芳名と其のお願い	(其の十)	
写経塔建立経過と、写経のお願い		
写経折本の御申し込み用紙		
鳥居観音だより		
裏表紙	鳥居観音案内図と諸行事のお知らせ	

(28)

(27)

(25)

(24)

(20)

(15)

(2)



道光禪師
（故高階瓏仙貌下）
御法話

理論より情実

（其 七）

「理論ならんよりむしろ情実なるをよしとす」といいますのは、若い者はとかく理論でいくが、年寄りには経験から万事情実でいく、どうも新旧意見の合わぬところから、年寄は論ずるに足らんなどと云って衝突をします。けれども理屈ばかりで世の中はいくものではありませんから、理論よりも情実でまとめていく方が有効であります。

それから、

「言語もまた本来空の活動に属するを以て人の住する所を察し、機に応じてその感情を活殺すること

自在なるべし。言語はよく国家を興起し、又よく滅亡せしめ、一身を安泰にし、又危険ならしめたる例古今にすくなしとせず故に韓非（中国戦国時代、法家の大成者、しばしば韓国を諫めて入れられず）に言難説難を説けり。忽にすべからざるは言語なり」

言語はよく国家を興起し、またよく滅亡せしむるとは、国の権威者、すなわち大臣などの一語は、国を興廃させるほどの力があります。また個人的に云へば、自分のことばづかいで自分を生かすこともあれば、殺すこともあります。それ程、言葉づかいはむずかしいのです。それに自分の云った一言が、十にもなつて、人につたわっていることがあります。また自分では云った覚えもないのに、あの人がかう云つたなどと、陰でうらまれることがよくある世の中なのです。余程用心してないと、禍いをまねくことになります。言葉程人の感情を支配するものはありません。

つぎに

衣服と家屋、これも自分の力で、ぜいたくするの

は差しつかえないようですが、他人の感じはそうではありません。ぜいたくすればやはり人目にはいかにも見せつけられるように思われて、世間の反感を買うものです。いくら財産があつてすることも、たとえば自動車の出はじめころは、ブウブウ鳴らし、尻の方からは臭い煙を吐いて、傍若無人にほこりを立てていけば、通行人はそれをにらんでいたように、すべてがそうでありますから、どれ程自分に力があつてすることも、余程考えなければならぬことです。それで

「浮薄華美に過ぐべからず、本来空の身を覆うを以て旨とし身分職業に応じて見ぐるしからざるを要す」とあります。

浮華に流れず、身分職業に応じて、見ぐるしくないでいどでいけば結構であります。人にはねたみ根情がありますから、華美にすぎますと、世間の人の感情にさわるものです。およそものごとは、万事適度でいくことが大切なことであります。また反対に「断空の徒殊更にこれを粗悪ならしむるが如きは

却つて人の嫌忌を招くべし」とあります。

これは世の中をつめた目で見すぎて、ことさらに虱のはったような、裾の切れた垢じみた着物を着て、遠慮もなく他家の座敷に坐りこむなどと云うことも、やはり注意しないと、もつとも悪い感情をいだかせることになります。つぎは

「本来空なるが故に宜しく正直を以て終始すべし。正直なれば鬼神も亦之に感動す」と。これは説明するまでもない。次ぎは

礼讓

「本来空なるが故に人に對して宜しく礼讓なるべし。己の能に誇り自ら高うして不遜なるときは人の嫌忌を招くべし」

と。これは人間には、うぬぼれがありますから、人のよいことは誉めたくありません。したがつて猜みがあるので、どれほど偉い人でも、余り自分からいばりますと人が反感をもつて、あの人は偉いか知らんが、なあんだといや氣をおこさせます。それで偉

ければ偉いほど、たいどを低くすることが礼讓であります。今日は自分から売る時代で、たとえば美術家の絵など、自分から、五百円の、千円のと価をつけて発表します。むかしはそうでなく、世間がつけてくれたものです。それが真個の価値であります。私の友達に、むやみと力むことの好きな者がありますが、人が来て敬意を表すると、ふんと鼻で答えて、力味かえつてうしろにそるから、かげでは天神様の刀と悪口をいわれています。

「みのるほど 頭をさげる 稲穂かな」
であります、けんその態度は真に奥ゆかしいものであります。

「さがるほど 人の見上げる 藤の花」
そこに、けんその徳があるのです。

どうもとかく、力味たがるのが人間であります。そんな人間にかぎって、出世している者は少なく、役所などにいきますと、受付方面にいる者にかぎって、恐ろしく力んでいるもので、奥に通ってみると、上役ほどおだやかな人格を感じるがあります。

す。ゆえに、

「己の能にほこり、自ら高うして不遜なるときは、人の嫌忌を招くべし」

とあるのです。全くけんその徳ということは、たいせつなものです。つぎは、

親切

これも説明するまでもない、たいせつなことです。文に

「本来空なるが故に、人に対して親切なるべし。親切なれば能く人を感ぜしむ。」

とあります。つぎに、

忍耐

「本来空なるが故に忍耐なるべし。忍耐なればならざることなし。故に忍耐なれば能く人を感動せしむ。」

つぎに

好悪

「己れの好(すき)(きらい)と人の好悪と異なるところあるも、害なき限りは争うべからず。」以下次号



評論家 藤原弘達先生と

鳥居観音祖開平沼先生との対談

人物評論、一月号の148頁から151頁に、46年の年末
もおし迫った14日、IN通信社に於て、テレビや著
書で有名な評論家、藤原弘達先生と、平沼先生との

対談がそのまま掲載されました。

白雲山救世大観音が十一月落慶開眼式と、耄万休
観音奉安式が挙行されて、一躍関東に有名になった
ので、IN通信社でいち早く対談の企画をされたの
で、記事を紹介します。

鳥居観音寺務局

まことに、たらちねの母の導きは、大慈大悲の観音さまの後光のように尊い。政、財界の実力者として知られた平沼弥太郎氏は、現世の欲望のむなしさを悟り、入間川の上流、名栗川のほとり名栗村（埼玉県）に独力で一大観音郷を築いた。

母への孝養の心が

藤原 秩父に近い名栗川に沿った白雲山の山ふところ、み仏の国はかくや、と思わせるような観音郷があつて、東京から一時半というレジャーには好適の距離でもあることから信心深い善男善女の参詣者のほかに、観光の名所として観光客があつてを絶たないそうですね。

平沼 はい、春は早くから梅がほころび、うぐいすが鳴き、沈丁花の香りが漂います。紫の三つ葉つじに続いて、山つつじや、どうだんの紅が燃え、さくら、椿、山吹、朴の花、藤の紫、あじさいと杉の老木に混じつて、新緑の中に花のバトンタッチ

が続きます。

夏は公害のない清らかな名栗川のプールで遊ぶことができ、レジャーだけでこられた方も、十分満足していただけるのではないかと思つております。

藤原 しかし、何といつても観音堂に安置された、あまたの観音さまなどの彫刻のすばらしさは、こんな山の中によくも……と参詣者の感嘆の声を集めているそうですが、その白雲山鳥居観音郷が、平沼さんお一人の力で三十年以上の長い歳月の間に築き上げられたものであると云うことだけでも驚きであるのに、実はわたし、ここへ来るまでに、その平沼さんが元参議院議員であり、不振の埼玉銀行を復興させ今日あらしめたところの元頭取の平沼さんと同一人物であることを知らなかったのです。いや全くびっくりしました。

鳥居観音郷を開かれたについては、何か動機がありましたか？

平沼 動機となつたのは四十八才で亡くなつたわ

たしの母が、全く信仰に徹していて、毎月十七日には村人を集めて、小さな観音像を祀ってご詠歌や観音経を唱え、皆にご馳走をしたりしていました。その母が観音堂を造ることを念願としていて、集まりのあるたびに、その基金にしようと、あがった穴あき銭や、五厘銭の入ったさい銭箱に、固く釘を打って、手をつけずにおいたのです。

藤原 それでは、お亡くなりになったお母さまへの孝養心で――

平沼 はい。今から六十年も昔、まだわたしが若かった時分に、母と観音堂を建てる場所はどこがいだらうか……と歩いたものです。そしていまの奥の院の場所に観音堂をつくることを依頼されていたのですが、ご承知のように沢山の役職について多忙をきわめ、果たすことができないでいるうちに、戦雲が急を告げわたしは歩兵中尉でしたから、いつ出征するかわかりませんし、このまま出征して戦死でもしたら、悔を千載に残すことになる、大急ぎで観音堂をつくることを決意し、聖観音と梵天、帝釈

天を彫刻し、お堂は母の指定したところの岩を切り開いて建立したのが始まりで、昭和十五年のことでした。

建立に十萬坪を奉納

藤原 しかし、いまから六十年も前の飯能周辺と云ったら相当にひなびていたところだったんではないでしょうか。どうしてお母さまはそこに？

平沼 実はわたしの先祖は大阪城の豊臣秀頼公の侍医で、今も当時の医者の道具が残っているのですが、その後、天草の乱には一方の首領となった森宗意軒の子大猷と云う人が遠祖で、徳川家をはばかって関東は吾野村に移り住むようになり、それから隣村の現在地鳥居観音のある名栗村に移り、そこで十二代住んでいるわけなんです。

藤原 ほほう、相当に由緒ある古い家柄でいらしたのですね。

平沼 あの辺一带は西川林業地と云って、昔から

吉野の林業地と並び称される地で、徳川時代からいかにだをくんで東京へ材木を商っていたのです。そしていかにだ師が東京の吉原で遊んだり、みやげものを買って来たりして、山の中であるにもかかわらず、案外と文化の進んでいたところだったのですよ。

藤原 なるほど山の中とはいえおもしろいところだったのですね。

平沼 その間には天明の大火など江戸の大火が何回もあって、そのときには材木の値が上がって、そんなことからわたしの先祖は代々、財をなしてきたわけです。

藤原 すると、その私財を観音堂の設立のため
に?.....

平沼 ええ、十万坪を奉納しまして、徳川時代からの植林した林を保存するとともに、銀行の休日には男衆を四、五人つれて、なたや鎌を持って、現在山に華やかな色どりを添えている花木を植えたり、雑木を除いたりしました。

藤原 彫刻から、山の木に至るまで、全く平沼さ

んの精神がこもっていたのですね。相当の私財を投入されたのですね。

平沼 計算はできませんが

救世大観音は世界の美の融合

藤原 その白雲山に、高崎の観音さまにまさと
も劣らないような立派な大観音を建立されて、技
術、構想などさまざまな点からも、非常に話題にの
ぼったようですね。できあがるまでには相当のご苦
心をなさったことでしょうね。

平沼 ええ、白雲山に救世大観音を建てようと決
意し、構想をねり歩き、実際に工事に着手してから
も三年余の歳月がかかりました。何しろ五百メー
ルもある山上に、十メートルの堂宇を置き、その上
に二十四メートルの大観音をのせたのですから、台
風、地震にも耐え得るように設計したり、その工事
だけでもたいへんなものでした。

藤原 構想を練るまでに、平沼さんは世界各地の

聖地といわれるところや、仏像、寺院を研究して歩かれ、そのときの成果が救世大観音に結晶されているのだといわれておりますが、その動機は？

平沼 一言にしていえば、平和を願う心です。

日本は敗戦によって思想は混乱し、物質文明のとりこになってしまいました。そしてまたもや日本は軍国主義になるのではないかと世界の人からおそれられてきているようです。こう云うときにこそ信仰心が必要になってくるのですが、信仰心を今の若い人たちに植えつけるには、一番どうしたらよいかと考へ続けたのです。

藤原 祖先を尊ぶという思想が希薄になり、既成宗教は葬式宗教に墮落した今日、それはなかなか困難なことですね。

平沼 いたずらに説教をしても耳を傾ける人は少ないでしょう。とすれば、信仰を植えつけるものには目につくものでなければなるまいと思いました。人間の本能というものは、高いものとか、偉いもの、威圧と、あこがれをもつところがありますからね。

藤原 それは理屈ぬきの万古不易の人間の心理でしょうね。

平沼 その確信を深めたのは、中近東付近の古跡を巡拝して回ったときです。アフガニスタンの有名なバミーヤンの石窟群、中に高さ五十三メートルもある大石仏には思わず合掌してしまいました。また神の聖地として畏れ信仰しているヒマラヤ山脈の雄大な景観や、ビルマ人がはるかにそびえ立つ金色のパコダに金箔を奉納することを一生の願望として、死に臨んではパコダを礼拝しながら息を引きとるのを無上の幸いとしている心理なども、外国人であるわたしにも理窟なしに共感できたからです。

藤原 そういう無言の教化のほうの説得力があるのです。

平沼 大観音を建てるについて、わたしは日本のそうしたものを参考にせず、世界中の宗教のいいところを融合させることにしました。たとえば玄関をギリシャ式にしたり、大天蓋を鏡ばりにして、イラソで求めた美しいというろを吊したり。四方の窓に

ステンドグラスを入れたり、というようにインド、中近東の建築様式を日本寺院の様式と融合させたわけです。

藤原 大胆な構想ですね。

現世（欲）にむなしさ

平沼 そのため、いろいろと批判もありましたが、日本の古来の寺を研究すると、やはりそこにはギリシャやインドなどの建築様式が入っているようです。それが長い歳月のうちに日本的なものとなつて同化されたにすぎません。さすれば、いまわたしが世界各国の宗教のいいところを融合させてつくつたからといって、長い目で見れば決して奇異なものではなくなるでしょう。

藤原 そのとおりですよ。美を創ろうとするときに、固定観念でのものを見てはいけませんよ。

平沼 わたしは、信仰はどの宗派に属するということではなしに、彫刻していれば満足する人間なんで

す。その彫刻も忙しい役職の合い間に続けてきた、いわばしろうとなんです。それが、それだから、わたしがそういう新しいものに踏み切れたといえるのではないかと思います。

藤原 いやいや、写真で拝見しましたが、決してしろうとなんていうものではありませんね。魂のこもった、りっぱなおつくりばかりですよ。何百年の後世にも残る大仕事をなさいました。

平沼 いえ、わたしがもし人さまにいくらかでも認めていただけるとしたら、仕事にかけた精神力だけですよ。

藤原 ユダヤのバイブルの中に、人間が後世に残すものは三つある。子供、財産、善行の三つである。そして子供、財産はむなしだが、善行のみが後世に残る——ということばがありますが、平沼さんの鳥居観音もまさにそれでしようね。見方によれば人生最大の道楽をなさったということもできるでしょうね（笑い）。

平沼 わたしは政界に入って、悪いこともおぼえ



観音の慈悲で平和な世界を——と語る平沼夫妻と藤原弘達氏

たし、それから埼玉銀行に入って十三年、銀行の更生を成功させたのですが、武鉄事件にぶつかって、櫛橋さんなんかと一緒に牢獄生活をしたおかげで、はじめて人間の欲から解脱することができたのです。

藤原 事業というものは利益の追求ということが大前提なので、欲があるのは仕方がありませんがね。

平沼 獄舎生活というものは、人間を強くしますね。それ以後のわたしは欲を離れて信仰に入り、仏像に専念して世の中のきたないことは何も耳に入らないという境地にきました。八十歳のこの年になると枯れて欲がなくなるのは当然かもしれませんが、なかなか人間というものは、五欲を捨てることができなぬものですね。

藤原 そこへいくと、わたしなどはまだ五欲のかたまりみたいなものですねあ（笑い）

平沼 しかし見方によれば、さっき先生が大道楽とおっしゃいましたが、これも大きな欲の一つが形

を変えただけかもしれないね。信仰的な大きな欲望をあらわそうというふうな――。

藤原 平沼さんのように、財界人、政界人として五欲旺盛な人でなければ働きをなさない世界に生きてこられて、財も名誉もむなしと悟ったときに、何らかの形で人間の精神に爪あとを残したいと願うようになるのが、達観した人の持ついきつく境地ではないでしょうか。奈良の大仏にしろ、聖徳太子にしろ、自分の生命の仕上げのようなものがあるわけですからね。そしてわたしから見ると万人の心を打つことができる、こういう創作に打ち込めたということはたいへん幸せなことだと思います。

平沼 幸せですね。それというのやはり信仰心厚かった母のおかげだと感謝しています。そうでなければ彫刻が好きだからといって、仏像を彫ることなどなく、モデルばかり追っていたかもしれないよ（笑い）。

藤原 しょせん色即是空ですよ（笑い）

平沼 三十年前、母の遺言で初めて仏像を彫ろう

としたとき、どんなに彫っても、威厳とか慈顔とかが出てこず、にやけたものになってしまったんです。

藤原 普通の彫刻以上にむずかしいものがあるんですね。

平沼 ええ、これではいかんと反省して、それから西国三十三カ所を二回まわって、一生懸命信心しながらいいものを見て歩いた結果彫ったところが、以前とは違った作品ができるようになりました。

万難を排して平和への祈願

藤原 いいものを見て、目が肥えると同時に、その中にこもる魂というものを会得なさったのですね。

平沼 昔の人は、やはり現代人にはまねのできない精神力を持っていますね。だからわたしはしろうとの強さを生かして、わたしなりに従来の型にとらわれないものを、美的観念でつくるのが一番いいの

ではないかと思つてやってみました。

藤原 それが仏像絵画や彫刻の根本の在り方ですね、そういうすぐれたものだけが、仁王にしろ、観音さまにしろ、時代によつて表現様式は違つても、人の心を打つものとして後世に生き続けてきているわけですからね。

平沼 「出る釘は打たれる」といいますが、何か新しいことを独創でやろうというときは、必ずそこに批判やら妨害が入るものですね。

藤原 非常に勇気のいることですよ。わたしも「創価学会を斬る」ではいやというほど経験しました。

平沼 あれは先生お一人で、おえらいことだと思つていました。

藤原 平沼さんの場合は、どういふ妨害にあわれたのですか？

平沼 たとえば武鉄事件もその一つで、その他いろいろありましたが、昔から寺院建立には法難がつきものですね。大観音を建てるに当たつてそのご体

内や堂宇の壁面に一万余体観音を奉安して、広く一般の有縁の方々の永代供養をしようと悲願を立てました。

藤原 一万余体観音というのは？

平沼 三十センチ位の大きさの観音像を作つてこれに供養したい祖先代々や、亡くなられた方の戒名をかいて堂内の壁面に奉安したのですが、これによつて何十万の霊が、観音さまゆかりのたくさんのお仏や菩薩に守られて極楽浄土に安住されるのではないかと思つたのです。

日中親善を願つて

藤原 一万余体の観音の悲願は達成されましたか。

平沼 おかげさまで、現在七千五百体の奉安があります。

藤原 本来先祖の供養をするのに宗派によつて區別するというのは無意味なことなんですね。

平沼 昭和三十五年に落慶式を挙行した、三蔵塔

の建立なのですが、この塔は、一階が四角、二階が八角、三階が十六角という設計です。

藤原 さきの世界の宗教のいいところを融合させようと考えられた。救世大観音のように、既成の仏塔意識をつき破ったわけですね。

平沼 この三蔵塔を建てたのも仏教を通して日中親善に役立てたいという願いがあったからで、当時三百六十余名の有名な発起人と二千余名の賛助員を得て石橋湛山先生が発起人総代になってくださいました。

藤原 三蔵塔というのは中国の玄奘法師にゆかりがあるのですか。

平沼 はい。昭和十七年に南京駐屯の高森部隊が作業中に、玄奘の頭骨を納めた石棺が発掘されて、それが日本にも分骨されたのを、水野梅暁老師が、その一部を鳥居観音に寄贈くださったって、三蔵塔の建立を懇願されていたのです。

藤原 なるほど。玄奘法師は印度に渡って十七年間勉強し、大乘仏教の基礎を築き、日本仏教の発展

に偉大な貢献をした人ですからね。その分骨を祀った塔があるということは羨望の的になるでしょうね。

平沼 それに、三十五年当時は現在のように中国が国連のヒノキ舞台にのぼってくる時代と違って、日中関係はまだ非常にむずかしいときだったんですね。それで、平沼は財界人として己の利欲のために塔建立を企てたというような中傷すらありました。これはあくまで、水野梅暁老師の懇望があったものだし、日中国交が回復した暁には、日中親善に役立つことを信じて建てたものなのです。

藤原 母堂への愛が信仰になり、やがて世界平和という大きな人類の悲願にまでつながっていかれたわけですね。いつまでもご壮健でいらして下さい。

藤原先生は、「政治学博士、政治評論家で、先生の著書で、「創価学会を斬る」はマスコミに大反響を与え!! 又その後「統創価学会を斬る」も、全国に強い反応を及ぼしています。



西遊記

(其の十九)

岡部千三

悟空は、先ず、きんと雲にのつて空に舞いあがり、たべ物をさがそうとしたが、

この山には、一匹のまものがすんでいた。

「よしてきた、悟空のやつが、るすの間に、あの法師をさらおうよ。」とまものは、にやりとした。

このまものは、天竺へ経文をとりに行く者をたべれば、不老長寿ができるという話をきいたので、一生けんめいである。

そこでまものは、からだをはって、若いむすめにばけて、おはちにしたべものを入れて、うやうやしく、三蔵法師にちかずいた。

「旅のお坊さま、これをおあがりください。」と、いともやさしく声をかけた。

すると法師は、びっくりした、あまり人通りのな

いこんな山の中で、このような若いむすめにであったのを、ふしぎに思った。

「むすめさん、あなたは、どっちからこられたのですか。」

「これにはわけがありますが、そのようなことより、まずこのたべものをめしあがつてください。」

そういって、むすめは、おはちをささげたのだが、法師は、それには手をださず、なにか考えているようすだ。

そばで、八戒は、たべたくて、思わず手をのぼしたが、そのとき、

「八戒、そのたべものは毒だぞ。」と悟空が空からあわてるようにおりてきて、八戒の手をとりおさえた。

「見やぶられたか、ざんねんな」

むすめは、さっとにげだした。

「まもの、まてっ。」悟空は、すぐさま、そのあとをおつていって、例の如意棒をふりかざし、ただ一うちに、まものをうちすえてしまった。」

法師はこの様子を見て、かなしげな目で悟空にいった。

「ああ、また、らんぼうをしてしまったのか、わたしにたべものをくれようとした、しんせつなむすめに、そのようなひどいことをするとは……。」

「お師匠さま、これはむすめではありません。お師匠さまをだまそうとした。にくいまものですよ、そしてはこんできた、このごちそうを見てください。」悟空が、ごちそうのいれてあるはずのおはちをあけると、中には、へびやなめくじが、うようよしていた。

「お師匠さま、ここにたおれているむすめは、まものぬけがらです。ほんものは、すがたをけしにげました。でも、きつと、またやってきます。」

悟空が、こういって、ゆだんなくあたりに目をくばっている、むこうから、こしのまがつたおぼあさんがやってきた。みるとさきほど、むすめがもってきたおはちとおなじものを、手にもっている。

「そら。また、まものがやってきました。」

如意棒をにぎってまっていた悟空は、いきなりおぼあさんに向けよるが早い、頭を一うちに、たおしてしまった。

法師は、びっくりしてしまって、ただ、たおれているおぼあさんを見つめていた。

「悟空、おまえは、また、おそろしいことをしてしまったね。」

こういって、じゅもんをとなえると、悟空のあたまの金の輪が、ぐいぐいと、彼のあたまをしめつけて、われるようにいたんだ。

「おゆるしくください、お師匠さま。」

「このぼあさんも、まものにちがいありません。たおれるのは、そのぬけがらで、ほんものは、遠くで、わたしたちをわらっていますよ。」

悟空はあたまをたたきながら、ころがりながら、こうわめいた。

法師は悟空のいうことが、うそでもないようなのでじゅもんを止めて、悟空のくるしみをゆるめた。

「あぶなかった。悟空というやつ、ゆだんのならぬやつだ。」

まものは、すがたをかくし、空へにげてから、こういった。法師にはそれがわからないようである、「悟空お前のようならんぼう者は、わたしのそばにはおけない。どこへなりと行くがよい。もうわたしをしんばいさせないでくれ。」

法師は、よこを向いたきりで、その上何もいわなかった。

「それほどにおっしゃるなら、わたしはすいれん洞へもどります。でもお師匠さま、これからさき、いよいよけわしい道になります。気をつけておいでください。そうして、もしも、わたしにご用がありましたら、「悟空よこい。」とおよびください。すぐさまかつけます。」

悟空は、いたむ頭をかかえながら、花果山のすいれん洞へきんと雲にとびのつていった。

波 月 洞

悟空がすいれん洞へ去ってから、三蔵法師は、八戒と悟浄をつれて、また旅をつづけた。けれども悟空のことが忘れられない。

「らんぼう者だが、心は正直だった。しあわせでいるだろうか。」と、そつと、つぶやくこともあった。

ある日、法師たちは、松の林の中をいくらあるいていっても、松の木ばかりで、つきることなく、家もない、くいしんぼうの八戒は、そろそろもんくをいいだした。

「あゝ腹がへってはいくさができません。いくさどころか、旅もできない。おししょうさま、たべものをさがしてきますから、悟浄と二人で、ここにおまちください。」

「そのこと、わたしもなにかほしくなったよ。いっ

ておいで。」

「では……すぐに、みつけてきます。」

八戒は、まぐわを肩に走っていった。

八戒をみおくれた、法師と悟浄は、草の上にこしをおろして、八戒のかえりをまっていた。けれども

八戒はいつになってもかえってこなかった。

悟浄はもう、いてもたってもいられなくなって、いらいらして、

「おかしい。なにかなければよいが……。」とあちらこちらをみながらおちつかない。

「きょうだいは、きつと道にまよったにちがいありません。むかえにいつてきます。」

悟浄は、法師だけをのこして、

「おーい、おーい、八戒のあにきよう。」

大声でよびながら、これも松林の中を走っていった。

十里程もいったとき、道ばたのくさむらの中から、ごーっ、ごーっ、ものすごいびぎがきこえてきた。それも木の根によって、

「はてな。あの声は、とらかな。それとも、大蛇かな。」

こわごわのぞいてみると、八戒がぐっすりねこんでいびぎをかいてねているところだ。



「おいきょうだいおきろ。」と悟浄は大声でどなた。

その声にあわてて目をさました八戒は、

「あーあ、わしのひるねのじゃまをするやつはだれだ。」

大あくびをした八戒は、口をとがらした。

「せっかくいいゆめをみていたのに、目をさましたアがって、えらいそんをしちゃったぞ、うまいものを口までもっていったところを、おまえが、とんだじゃましやがって、たべそこなつたぞ。」

「いちのきたない八戒よ、どんなごちそうでも、ゆめでは、はらのたしにはならないぞ、そんなことより、おししようさまが、ひとりでもまっていなさるのだ、おまえが早くかえってこないの、おれも心配になってな、むかえにきたのだよ」

「あアそうか、こうなれば、たべものどころのさたじゃないぞ。」

ふたりはいそいで、もとの松林へかけもどつたが、二人はあつとおどろいた。

そこには三蔵法師のかげもかたちもみえなかったからだ。いくらさがしてみても、法師はいなかった。

「おししようさまア、悟浄ですよう。」

「おししようさまア、この八戒の声がきこえませんか、きこえましたら、へんじをしてくださいよう。」

いくら二人がよんでみても、きこえるものは松の葉をふく風ばかり、二人の声は山彦となつてもどるだけ。

「これやア、たいへんだよ、おししようさまは、わる者にさらわれたのかもしれないぞ、」

二人は松林のおくへ、おくへと、はいっていくと、はるか彼方に、高い塔がみえた。

「悟浄あれをみる、お寺らしいな。おししようさまは、あそこかもしれないぞ。」

「そんならいいが、いつてみよう。」

寺らしい門のそばへいくと、石の門があつて、「波月洞」と刻つてあつた。

(以下次号)



田舎医者（其ノ三）

見川 鯛 山

挿絵 おおば比呂司

田の畔医者

うしろに大きな杉の森のある村会議長の家は、すぐそこに見えているが、ほこりっぽい村を廻って行くより田の畔を通った方がずっと近い。

私は重い往診鞆をぶら下げ、平均をとりながら綱渡りのように狭い畔を歩いた。もう燕が来ている。地面すれすれに飛び交い、ときおり田へ下りて土をついばんで行く、初夏の太陽が銀色にかがやき、水田がキラキラと光り、その照り返しが顔に熱い。そこから石灰の肥料が匂った。

「お大尽様」と、議長の家をこの部落ではそう呼んでいる。お大尽様は、選挙のたびに裏山の杉を一本ずつ切る。樹令何百年の巨木は、悠に三百の選挙

民に酒をふる舞って足りた。そしてその都度、彼は間違ひなく当選するのだった。

いつしか村会議長は、隣町に妾をかこった。村議会が終ると、役場のライトバンが土埃をたてながら、忙しくそこへ通った。だから彼の細君のヒステリーは、更年期だけがその原因ではない。

頭の上で、雲雀が鳴きだした。空を見上げたら涙が出る程眩しく、私の片足が畔を滑って、ドボドボと深い水田に沈んだ。大いそぎで、引っこ抜くと、その泥んこの足は靴をはいていない。私は四ツんばいになって泥の中を掻き廻してみたが、靴はなかつた。気を静めて、盲腸手術のように泥田の中を深くさぐったら、底の方にやっとみつかった。しっかりとかんでグイッと引きずり出すと、泥水がボタボタ

たれて、ズボンを汚した。私は両手をひろげ、泥靴をぶら下げながら、グチャグチャと歩いて行った。

どうせ私はみんなが陰でいつてるように、田舎医者なのだ、

議長の家につくと、庭にピカピカ光った自動車があった。金ボタンの制服を着た運転手が、毛ばたきで車の埃を落している。

「おお、新車だな。こんないい車、役場でいつ買った？」

私ができくと、運転手は、根性の悪い目で私をジロツとにらみつけ、返事もしない。こんな不愛想な男を、なぜ役場では雇っておくのだろう。だが私はニコニコしていた。

「フワフワして気持よさげだナッ。帰りに途中までのせてもらうかな、泥だらけで歩きづらいんだ。」すると、彼は鼻の穴をふくらませて、私の匂いを嗅いだ。

「臭えな、あんたはこやし臭え。」
と、顔をしかめた。

「そんなに臭えかね？ 私には左程匂わないが、」
と私が自分の匂いをフンフン嗅いだら、

「ひでえ匂いだ。これがわかんねえだから、オメエ余つぽど鼻悪いだぞ。いっぺんうちの病院に来て、よっく診てもらえ、」

「病院だと？ これ、役場のじゃないのか、」

私ができ直すと、彼は鼻をつまんだまま突っけんどんに、ドアの埃を毛ばたきでさつと払った。
と、そこに金山病院と、大きく金文字がかいてあった。

——頼まれたって、もう、誰がのってやるもんか——

私はそっぽを向いて、またもやじろべえみたい
に両手をひろげ、泥だらけの足で議長の家へ入って
いった。

うすくらしい広い土間へ入ると、炉端で、議長が大声でいった。

「やあれ、ご苦労様、あれ？何だや…その恰好。
田圃で泥鰌どろぢでも掘ったんか!!」

そういうと思つたのだ、この男は。私が、ムッと怒つてから、また彼がいった。

「ちょうどいいとこさきてくれた。いま、町から金山博士が来てゐるだ。博士も町会議員だ、そのよしみでな。さ、こっちさ上がれ、」

「いいや、私はここがいい、」

すねながら、私は炉端へ浅く腰をおろした。

「かかアめ、なかなか治らねもんで氣イもんでるだ。誰が診たつて同じだべにヨ。俺あんただけでもないと思つてただが、あいつの血がさわぐだな、ヒステリベえ起すだ。いま、あつちで博士が診察してゐるだ、」と一応は私に弁解して、あつちの方をあとでしゃくつてみせたが、首が太すぎて議長にはあごなんかないのだ。

私はムツとしたまま炉端の灰を火箸で引つかきまわした。すると、粗朶そだがもえつき煙が目にしみた。

だから私は、ますます渋い顔をしていた。

看護婦を従えて、博士が出てきた。

「おや、これは先生、お忙しい?」

と院長は運転手のぶんまで、あいきょうがいい。白鯨みたいに大きなずう体のくせに、女みたいな声を出す人だ。

「なあに、この医者いつだつてひまだ。毎日泥鰌掘つて遊んでるだからナ」

そばで、猪っ首がまた悪口をいった。

「ご冗談を……」

と博士は笑つたが、その顔を遠慮深くしかめ、白いハンカチで鼻をおおつた。どこからか、こやしが匂うらしい。彼は鼻声でいった。

「患者さん、お先に拝見しました。重症ですね。精神科へ収容したらどうでしょう」

私がびっくりすると、

「はい。ここの奥さんひどいヒステリーです。」

と、博士が頬を撫ぜた、彼は引つかかれて来たのだ。「まったくだ、あのアマ、俺ことけとばすだぞ、きょうは特にひどい。あんたも氣イつけてかかれや、」と亭主も忠告してくれた。

私は泥んこのズボンを脱いで、ステテコ一枚にな

った。看護婦が失敬にそれを見て笑った。薄暗い病室へはいる、細君がこっちへ背を向けて坐っていた。やせた肩が小刻みにふるえ、泣いていた。

「気分どうかね、外はいい天気。」

声をかけたら向うむきで彼女がいった。

「先生もグルだ、帰っておくれ!! みんなわたしこと、無理やり気違い病院さ入院させる気だ。わたし追出して、あとにあの女つれてくる算段だ。親爺に頼まれて、博士も、あんたも、そうでしょ!!」
とまた泣いた。

「私は議員じゃあない。だからグルになんかならないよ。それにあんたは気違いじゃない。少しヒステリーなだけだ。うちの奴と同じくらいだナ、」
慰めたら彼女がこっちを向いた。

「奥さんも?、じゃ先生にも妄いんのか?、」

「妄なら何人もいる、議長にア負けない」

と、私が威張ってステテコであぐらをかいたら、細君が初めて笑った。

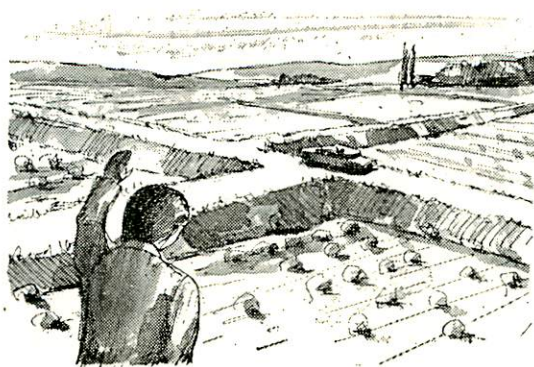
「先生は面白い」

「私が?」

「ンだ、面白い。明日もきておくれ、」

私は、こういう人に好かれるたちなのだ。炉端で、二人の議員たちが、入院のことを相談していた。田の畔医者が、今更何をいおうと、誰も信用しないのだ。だから私はささと帰った。

さっきの畔道を歩いていたら、病院の自動車か埃をたてて、村道を走ってきてその窓から博士の白い手が遠くまで、バイバイしていった。





第十集

二月より五月までの御申込
 一、敬称は略させていただきます
 一、〇印はA観音
 一、間違がありましたら御教示ください

住所	氏名	住所	氏名	住所	氏名
大宮 川島 喜代	八王子 須賀原新吾	大宮 木村長四郎	山本治一郎	高柳八太郎	粕谷 治策
市川 酒井 英一	川崎 村上 明一	平井 千三	岡部 千三	島村 喜一	小沢 寿男
横濱 郷司 恵子	平戸 正男	川口 高橋 藤男	山口 義久	高松 康正	鈴木 一雄
飯能 間辺 辰雄	高橋藤良雄	島根 渡利 昌平	下田 佐重	下田 保平	小高 清吉
川崎 梶原 うた	梶原 うた	台中 野 茂木 進吾	青木 梧桐	青木 清吉	小林 秀夫
船橋 増田千鶴子	増田千鶴子	栗 王 梧桐	小 林 秀夫	小 林 秀夫	田 畑 定胤
練馬 花谷 数夫	花谷 数夫	浦 和 宮寺 博直	湯 村 浩資	湯 村 浩資	齊 木 貞次
国分寺 三宮 菊枝	三宮 菊枝	野 山 本 正之	山 本 正之	山 本 正之	粕 谷 明子
春日部 外 一体	外 一体	本橋 俊男	本橋 俊男	本橋 俊男	粕 谷 明子
高崎 松本 健次	松本 健次	川畑 源一	川畑 源一	川畑 源一	平 岩 研作
飯能 神山 雅雄	神山 雅雄	川畑 源一	川畑 源一	川畑 源一	平 岩 研作

第十集合計

四七

内訳 BA 一三四

累計 七、八七五

内訳 BA 一、五一六
六、三五七

される方は、庭からながめる風景に目がかがやかせ
 ていられます。

自然岩から流れおちる清水に口をすすぎ、手を洗
 って、堂宇内におは入りになりますと、正面の阿弥
 陀如来、右手の不動明王、左手の吉祥天、素刻りの
 十二神しよう及び老万體観音に感動されて、永代を
 申し込む方もあります。

老万體観音は満堂まで引つづいて奉安をおねがい
 していただきますので、ご協力くださいませ 合掌

第十集では以上の数とな
 りました。
 春から、夏、秋にかけて
 来山の方がめつきり多くな
 りました。
 救世大観音へ初めて参拝

納経塔建立の経過と写経のおねがい!!

○面白岩上にて地鎮祭を執行

昭和四十六年六月十七日、三信工業の請負いによって、納経塔の地鎮祭が、午前十時より、枝久保宮司によって執行されました。

建立地は、救世大観音を真近に仰ぎ、南方には玄奘三蔵塔を眺めて、その位置も眺望もまことによい地点が、選定されました。

以来資材の搬入及び、施工も順調に進み、その技術も多年の経験の上から申し分なく進められて参りました。

○上棟式も盛大に執行

昭和四十七年五月十七日、午前十一時から青葉薫の中に於て、多数のご来山各位のご参列を賜りまして盛大に執行いたしました。

百余名に及びご参列の方々が、仮の階段を登られますと、……香煙立ちこめる境内に読経の音声は流れ、次ぎ次ぎと、焼香が行なわれました。

この塔の高さは十五米で、内外には、彫刻が施されます。

この型は、ガンダーラの典型的な形式をとり入れて、すべて桐江先生の設計によります。

内部の上方円形の処には印度式釈迦如来(約二米)を安置し、下の角形の処に、窆万體観音に対し、一万巻の般若心経を納められるようになっていきます。

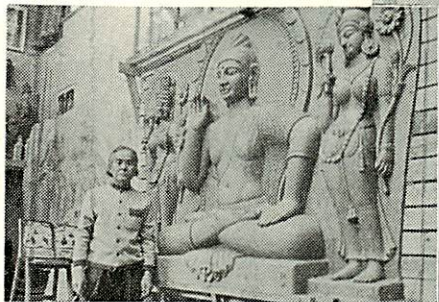
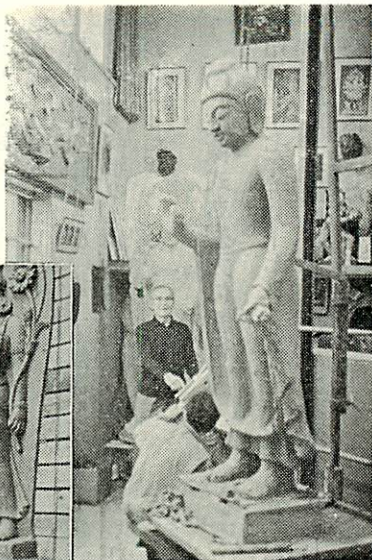
鉄筋コンクリートで出来ていきますので、永久に残されます。

式後大観音右側のゲレンデで、風光を眺めながら和やかなうちにご中食をとられました。

写経塔内：安置される釈迦如来

外部壁面、釈迦三尊

(共に江古田アトリエにて製作中)



○ 写経のおねがい

すでに救世大観音の堂宇内には、老万體観音が奉納されて、八千に及んでおります。

皆様から奉安賜りました、老万體観音を、一層鄭重に致すため般若心経の写経、老万巻の奉納をお願いする次第でございます。

写経の利益は一切の罪業を消滅し、普く仏果を成就すると云う、偉大な功德がありますことから、この仕事に心を込めました。

何卒、ご理解賜りますようお願いいたします。

○ 写経の御申し込みについて

写経の折本、納経写経科一巻 一金五百円

お一人で何巻でも結構です。

恐縮ながら整理上お申し込と同時にご送金ください。(お申し込次第写経折本お送りします)

お申し込書送り先

埼玉県入間郡名栗村鳥居観音寺務局

電話(〇四二九七〇四)二七五

練馬区小竹町一ノ五二鳥居観音東京

事務所平沼方電話(九五五)〇四六五

埼玉銀行 名栗支店 鳥居観音口座

埼玉銀行 練馬支店又は振替用紙で

郵便局振込 東京一五五八八五

お払込先

御申し込みの際は、この用紙を御利用下さい。

………き………り………と………り………線………

写経折本申し込み用紙					取扱者				
					ご芳名				
写経用折本巻数	ご住所	ご	住	所	ご	芳	名		

鳥居観音だより

○ 専任僧侶（小林高安老師）を迎えて

しばらく空白だった当山専任僧侶が、去る七月十一日新任されました。

当山の最も本質的な仕事専任によって、日々、営まれることは多くの篤信各位にご満足いただけることとよろこんでおります。

専任僧侶は小林高安と申されて、日本大学専門部宗教科を卒業、以来大本山永平寺を初め、海外回教師として活躍され大船観音協会専任僧侶から、当山へ専任僧侶となりました。

○ 松田江畔先生来山

七月十二日松田江畔先生がご案内で、台湾からの来客、王梧相氏一行七名来山、王氏も耄万休観音を奉安されました。

○ 平沼開祖夫妻インドネシヤへ

七月十六日、平沼開祖夫妻は、まな娘さつき（内

田桂一郎氏夫人）まりえ（山崎完氏夫人）を伴って親子水いららずでインドネシヤ（バリ島中心に）仏跡の視察に羽田空航から出発、

七月二十四日無事帰国されました。

○ 薬師如来の開眼式挙行

七月二十六日午前十一時、救世大観音堂宇内において完成された、薬師如来（高サ二米余）の開眼式を、小林高安老師によって、平沼開祖夫妻、関係者及参拝者参列のうちに挙行了しました。

○ 流灯法要と、花火大会、盆踊り大会

八月十六日午後五時本堂で流灯供養、引つづいて川原で流灯、午後七時半より花火大会と盆踊り大会が盛大に開かれました。

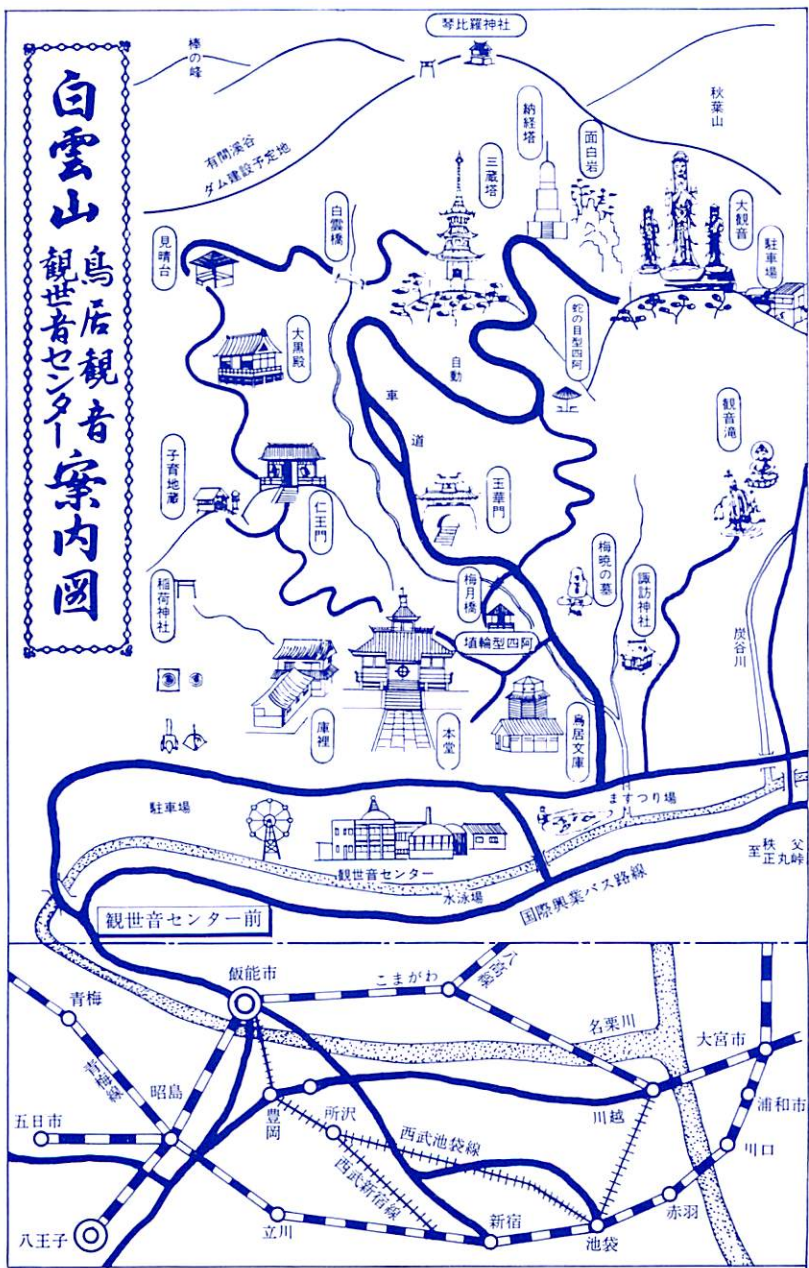
○ 名栗川プールにぎわう

毎年センターが経営するプールも多数の人に利用されよろこばれました。

とりの 第二十四号 発行日 昭和四十七年十月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二ノ八ノ十五 武州印刷株式会社
印刷所 鳥居観音電話〇四二九七〇四、名栗二七五番

白雲山

鳥居観音 観世者センター案内図



秋の大祭

- 11月17日午前10時 本堂
- 11時 玄奘三蔵塔
- 11時半 救世大観音

白雲山の紅葉が10月から11月にかけて染められ、丁度その盛りが大祭の頃と思われます。

どうぞ、紅葉を探勝がてら、皆様お誘い合わせの上、ご来山くださいませ。

清澄な空と空気、そびえ立つ救世大観音の面ざしが、皆様の瞳にくっきりと浮びます。

燃え立つような紅葉と白との調和が印象的です。

新年祈禱お申し込みのお願い

- 元旦から三日まで新年祈禱を執行します。
- 願意。家内安全。交通安全。病氣平癒。商売繁昌。安産。試験合格。その他。
- 祈禱料 金五百円 千円 貳千円以上。
- お申し込みは、12月末日までに、鳥居観音寺務局へ、お申し込みください。

祈禱会は、午前10時から、本堂に於て執行しますから、ご参拝くださいませ。

その他の行事

- 毎朝、毎夕、読経奉拝 毎月17日法要並に御法話
- 大黒祭 12月10日午後1時より 奥の院にて
福引があります。